様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　７ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０１１６８

研究課題名（和文）1800年代の東アジア海域における近代海図の整備過程：英米日水路部の活動を中心に

研究課題名（英文）Development of Modern Nautical Charts in East Asian Seas in the 1800s

研究代表者
鳴海　邦匡（Narumi, Kunitada）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：００４２０４１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：2020年度開始予定であった研究は、東アジア海域における1800年代の近代海図の整備を明らかにすることで、英国水路部や米国測量艦隊の活動、西欧の探検的航海に注目した。主な作業はイギリスやアメリカでの資料調査を予定した。2019年後半からの新型コロナウイルスの世界的流行により、海外での資料調査が困難となり、研究が一時中断となった。また本務校の意向から国内調査も自粛し、それは2022年度まで継続した。そのため、3年の研究期間は、準備として関連資料の収集、過去の調査資料の整理、関連テーマの研究報告に留まり、研究費を十分に執行できなかった（20%程）。その結果、本課題の目的は十分に実施できず終了した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究活動を十分に実施できなかったが、本研究成果の学術的意義は次の通りである。日本周辺海域における地図（海図）に関する研究を実施した。また地図史に関する研究を実施した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the development of modern nautical charts in the East Asian waters in the 1800s.And the main work will be research in England and the United States. Due to the pandemic of the new coronavirus, it became difficult to conduct research in foreign countries and Japan, so we suspended our research.Therefore, I was not able to conduct sufficient research during the research period (research expenses were about 20%).As a result, the purpose of this research could not be fully achieved.

研究分野：歴史地理学

キーワード：海図　東アジア海域　英国水路部　日本海軍水路部　近代　水路誌

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本における近代地図史の研究は他の時代に比べて乏しい。欧米の研究を見ると、1980 年代の J. B. ハーレーら以降、権力と地図という視点から近代国家（帝国）を扱うものが増加した（Harley 1998）。それらの関心は思想的解釈に偏ったが、次第に具体的な地図化のプロセスを明らかにする方向に進んだ。この方面で、日本では小林らによる「外邦図」研究が、戦争と地図という観点から近代地図に関心を寄せた数少ない近年の研究の一つであった（小林編 2009;小林編 2017）。ただし、主な対象が陸上の地図であり、海図の検討を残した。

本研究の課題は、東アジア海域における近代海図の整備過程である。この領域に関心を寄せた欧米の地図史研究は多く（Hayes 1999, 2001; Suarez 2004; Blake 2006; Schider 2017）、特に 19 世紀以降、世界的に海図作成の主導した英国水路部の活動に関するものが多い。しかし、東アジア海域は、地理的に遠く、また地名の難解さもあって研究は少ない。日本の近代海図に注目した国内の研究も少ないながら存在するが、日本の枠を出ない傾向が強い（Pascoe 1972; ビーズリー2000; 横山 2001; 菊池 2007）。

欧米諸国は、18 世紀後半になると東アジアに本格的な植民地進出を進め、例えば英国は時に武力を伴いながらも清国の港を開港させ、貿易拡大を求めた。その際、安全確保のために海図の整備が必要となるが、その整備過程は余り議論されていない。当時、英国が東アジア海域においても海図作成を主導したが、米仏露国もこの地域の海図整備を進め、相互に影響を及ぼした。

欧米による幕末日本への来訪や開港もこうした海図整備を伴い、さらに明治以降の日本水路部による近代海図の整備過程も、特に英国水路部の影響下で進んだ。欧米により先導的に進められた東アジアの近代海図の整備過程の中に、日本の近代海図を位置付ける必要がある。

２．研究の目的

以上から、本研究では 1800 年代の東アジア海域における近代海図の整備状況の解明が目的となる。特に目的の追求に際しては、当時の海図と関連資料の調査と分析が中心となる。以下、このテーマの検討のために取り上げる 4 つの課題を説明する。

A【英国水路部による東アジア海域の海図の整備過程の理解】

1800 年代、東アジア海域における海図の作成は英国水路部（1795 年設立）が主導した。この海域の海図を南から北に整備する過程は、東アジアにおける英国の重要な出来事を契機に進められた。航海の安全確保のため、海図は何度も修正される。多くのハイドログラファー達の測量で東アジアの海図が作成・修正されたが、全容が十分に示されていない。その解明がこれらの海図群の目録作成とともに第一の課題である。

B【ダニエル・ロスによる初期の海図の理解】

英国水路部による東アジア海域の海図の作成は 1800 年前後に中国南部から始まる。この時期、海図の作成は、英国東インド会社に由来するボンベイ海軍から英国水路部に移行した。ダニエル・ロスは、この時期、双方に所属して活躍したハイドログラファーである。彼の作成した海図に注目し、初期の活動を具体的に検討するのが第二の課題である。

C【米国の太平洋測量艦隊による英国水路部製海図の修正】

1800 年代、米国は数次にわたり太平洋地域に測量艦隊を派遣した。19 世紀後半、米国水路部が英国水路部製の日本と朝鮮半島の海図の修正のため、盛んに測量を実施しており、こうした米国による英国水路部製海図の活用と修正作業の検討が第三の課題である。

D【日本水路部による明治期の海図整備過程の意味】

A～C の視点から日本海軍水路部により作成された明治期の海図を理解する。例えば、日本海軍水路部が台湾出兵時に準備した海図は英国水路部製の海図を急ぎ複写したものであったように、明治前半はこうした複製海図が作成された。明治後半になると東アジア海域の海図作成を日本が先導する地域も登場してきた。明治期の日本海軍水路部の活動を、東アジア海域の海図整備過程に位置付けることが第四の課題である。

３．研究の方法

本研究は 3 年間を予定し、主な調査機関は、対象とする資料を所蔵する、英国立公文書館、大英図書館、米国立公文書館、米議会図書館を予定する。そのほか、海洋情報部（日本）や国立国会図書館（日本）なども対象となる。主な調査対象となる地図は、大型で大量に存在する場合が多く、現地での調査（調書の作成、資料の撮影）には多くの労力が必要となる。

４．研究成果

2019 年中に申請した本課題は、2020 年度から実施する予定であった。研究内容は上記に記した通りである。それに関連する資料の多くは、主にロンドン（イギリス）における大英図書館や英国公文書館、ワシントン DC（アメリカ）における米国立公文書館やアメリカ議会図書館などが所蔵しており、それらの機関での調査を基本作業としていた。

しかし、2019 年後半頃から新型コロナウイルスによる感染が拡大し始め、2020 年 1 月には日本で確認されるとともに、世界的流行へと拡大したことから、海外渡航が不可能となり、海外での資料調査が実施できなくなった。この時、流行の終息時期が見通せないことから、熟考のうえ、終息までは研究の取り組みを一時的に中止すると判断した。それは本課題の経費の多くが海外調査費であり、申請内容と異なる研究費の使用を控えるべきと考えたからであった。

その後、所属校の意向もあり、国外調査はもちろん、国内調査も自粛することとなり、それは 2022 年度まで継続した。そのため、この間、ほぼ研究費を執行することができず、3 年の研究期間では、研究の準備として関連文献の収集や過去に調査した関連資料の整理、一部関連テーマの報告（雑誌論文や書籍）に留まり、その執行率は全体の約 20%となった。その結果、本課題の目的は十分に実施できずに終了した。

十分に研究活動を実施できなかったが、以下のように一部成果を報告することができた。それらは東アジアにおける近代海図の整備過程を扱ったものであり、その内容は上記課題のＡとＤに含まれる。

①小林茂・鳴海邦匡（2021）「近世の日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用：近年の成果をふまえた展望」『大阪観光大学研究論集』21、21-44 頁。
②鳴海邦匡・渡辺理絵・小林茂（2022）「台湾遠征～日清戦争期までに台湾の主要港湾について作製された英国製海図の翻訳(覆版)にみえる地名表記」『地図』60(1)、17-35 頁。
③鳴海邦匡（2021）『地図』（ものと人間の文化史 187）法政大学出版局、314 頁
④鳴海邦匡（2023）「近代以降の地図」（日本地理学会編『地理学事典』丸善出版）440-441 頁。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小林茂、鳴海邦匡	４．巻 21
２．論文標題 近世の日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用 ー近年の成果をふまえた展望ー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大阪観光大学研究論集	６．最初と最後の頁 21-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鳴海邦匡、渡辺理絵、小林茂	４．巻 60（1）
２．論文標題 台湾遠征～日清戦争期までに台湾の主要港湾について作製された英国製海図の翻訳(覆版)にみえる地名表記	５．発行年 2022年
３．雑誌名 地図	６．最初と最後の頁 17-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計4件

１．著者名 鳴海 邦匡	４．発行年 2021年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 332
３．書名 地図	

１．著者名 平井 松午	４．発行年 2022年
２．出版社 古今書院	５．総ページ数 280
３．書名 伊能忠敬の地図作製	

１．著者名 小野寺 淳、平井 松午	４．発行年 2021年
２．出版社 創元社	５．総ページ数 320
３．書名 国絵図読解事典	

１．著者名 日本地理学会編	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 844
３．書名 地理学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	塚本　章宏 (Tsukamoto Akihiro) (90608712)	徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・准教授 (16101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関